下村喜三郎と郊外住宅地開発

KISABUROU SHIMOMURA AND SUBURBAN HOUSING DEVELOPMENT

和田康由*, 寺内 信**

Yasuyoshi WADA and Makoto TERAUCHI

This study will show how suburban housing was developed before the war, through Kisaburou Shimomura's achievements. When he worked for Kansai Tochi Co. Ltd., He visited countries in Europe to see the "garden city" movement. He designed Ohmino Den-en Toshi. He tried to create a "garden city" worthy of the name by introducing the concept of radiating roads and setting limits on the use of land. Moreover, by publishing pamphlets and the KANSAI TOCHI JIHO, he was eager to educate others on European land use and British "garden city" idea at the beginning of the twentieth century. He was transferred to Hanshin Kyuko Dentetsu Co. Ltd., took part in housing management for office workers at Tsukaguchi Estate, and he opened a drafting office. He was active as an architect and housing designer.

Keywords : Kisaburou Shimomura, suburban housing, Kansai Tochi Co. Ltd., Ohmino Den-en Toshi, Hanshin Kyuko Dentetsu Co. Ltd.

下村喜三郎, 郊外住宅地, 関西土地㈱, 大美野田園都市, 阪神急行電鉄㈱

1. はじめに

明治末から大正末にかけて土地会社が数多く設立され, 経営地の対象を郊外に向けていた。大美野田園都市を開発した関西土地株式会社もそうした部類に属している。同社が開発した大美野田園都市については, 従来, その背景や計画者等の詳細が十分論じられていたとは言えない。本論文¹⁾では, 大美野田園都市の主たる計画者下村喜三郎を取り上げ, 彼の履歴, 思想・デザイン上での影響関係を探ることから, 大美野田園都市及びそれ以降の彼の都市計画・住宅建築の特徴を明らかにし, またそれらを戦前の郊外住宅開発の系譜に位置付けることを目的とする。

2. 下村喜三郎の履歴

下村喜三郎²⁾は表一に示すように, 明治31年2月27日に大阪市浪速区の鈴木家で生まれ, 大正13年下村家に婿養子に入った。彼は大阪府立今宮中学校を経て, 大正5年4月東京高等商船学校に入るが半年で退学し, 翌年東京美術学校図案科第二部(建築科)に入学した。卒業制作の子供の会館図一1は, 当時の近代建築運動の影響を感じさせる作風である。

下村は, 大正11年3月24日東京美術学校を卒業した後, 早稲田大学理工学部建築学科で聴講生として在籍するが2ヶ月で中途退学する。同年彼は, 東京米国建築合資会社に就職するがこれも2ヶ月で退職した。しばらくして, 株式会社大林組東京支店に入社し, 東京歌舞伎座(岡田信一郎設計)の工事に携わっている。

大正12年9月1日東京神田で関東大震災に遭い, 堺市高師浜に

引っ越すが, 火災に遭い, 阪急沿線牧落百楽荘に移り住む。この時期, 下村は関西土地㈱社長竹原友三郎に建築技師として郊外住宅地

表一 下村喜三郎の履歴

年 代	月・日	学歴・職歴
明治31	2・27	大阪市浪速区鈴木家にて誕生
44	4	大阪府立今宮中学校入学
大正4	3	大阪府立今宮中学校卒業
5	4	東京高等商船学校に半年間在籍
6	4・6	東京美術学校図案科第二部(建築科)入学
11	3・24	東京美術学校図案科第二部(建築科)卒業
	4	早稲田大学理工学部建築学科聴講生入学
	6	早稲田大学理工学部建築学科聴講生中退
		東京米国建築合資会社入社
	8	東京米国建築合資会社退職
	11	(株)大林組東京支店入社
		東京歌舞伎座(設計岡田信一郎)の工事に関係する
12	9・1	東京都神田にて関東大震災に遭う
13	10	(株)大林組東京支店退職
		東京から堺市高師浜に引っ越し, 下村家に婿養子に入る
		高師浜自宅火事で消失, 阪急沿線百楽荘に引っ越し
15頃		関西土地(株)技師として入社
昭和4	春～秋	大美野田園都市設計のため欧州各国を視察
6頃		大美野田園都市住宅地及び住宅設計
7頃		下村建築事務所開設, 6月頃百楽荘で自宅新築
8頃		関西土地(株)退職
9頃		阪神急行電鉄(株)共栄部嘱託として入社
20	9・5	京阪神急行電鉄(株)退職時土地経営部に在籍
26		京阪電気鉄道(株)営業局田園住宅部長
28		京阪電気鉄道(株)営業局田園住宅部長定年退職
40頃		阪急産業(株)不動産部嘱託として入社
54頃		阪急産業(株)退職
63	8・1	没する

参考文献: 大阪府立今宮高等学校, 東京藝術大学, (財)日本建築協会
阪急電鉄(株), 京阪電気鉄道(株), (株)大林組東京本社
株式会社大林組『大林組八十年史』1972. 10、本人及び子息談

本論文は1986, 1988年に日本建築学会大会学術講演梗概集に発表したものをもとに加筆, 修正を加えている。

* 大阪市立工芸高等学校 教諭・工修

** 大阪工業大学工学部建築学科 教授・博士(工学)

Teacher., Osaka Municipal Arts and Craft High School, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, faculty of Eng., Osaka Institute of Technology, Dr. Eng.

図－1 東京美術学校図案科（建築科）卒業制作「子供の会館」

建設に関わる仕事を行うために招聘され同社に入社している。入社後4～5年して、社長の命により田園都市を視察するために、彼は欧州各国を歴訪している⁹⁾。その目的は大阪南部南海鉄道沿線に田園都市を設計することであった。昭和6年頃大美野田園都市を設計し、大美野での住宅地経営が軌道に乗った頃、下村建築事務所⁹⁾を開設している。

昭和8年頃阪神急行電鉄株式会社の求めに応じて、彼は関西土地を退社し、同社共栄部の嘱託⁹⁾となる。仕事内容は主に宅地開発や住宅地経営の指導であった。約20年間勤めた後、同20年9月5日に退職した。退職時は組織替えした土地経営部に所属していた。

下村は同26年京阪電気鉄道株式会社営業局田園住宅部長として招かれ2年程勤めて定年（55才）で退職する。同40年頃、彼は京阪神急行電鉄の関連会社阪急産業⁹⁾に招かれ不動産部嘱託として同54年頃まで主に宅地開発に力を注いだ。退職後は、兵庫県西宮市塩瀬町生瀬で生け花の師匠をする米子夫人と過ごし昭和63年8月1日没する。

3. 関西土地株式会社時代

3.1 関西土地株式会社の概要

関西土地は、その前身である香里園土地建物⁹⁾（大正8年12月創立 社長 國枝 謹 資本金300万円）の事業を竹原友三郎（竹原商店二代目店主一株の仲買人）が受け継ぎ社長となって社名を帝国信託⁹⁾と改め、本格的に不動産事業にのりだした。帝国信託は多くの土地会社を2度に亘り合併吸収し、大正12年10月社名を関西土地と改称した。

この時期から、関西土地の本格的な宅地開発がはじまる。下村喜三郎が入社したのはその時期である⁷⁾。関西土地は郊外住宅地としては丸山荘園、高師浜、大美野などを開発し、市内にあっては森小路、西平野、今津で土地区画整理事業に参画して中心的立場で宅地開発を推進するなど鉄道沿線や市内で手広く住宅地経営を行っている。

とりわけ、関西土地は当時注目されていた田園都市を南海沿線北野駅西方の地において社運を賭けた事業として開発している。したがって、同社は表－2に示すように旧日本建築協会の創立十五年の記念事業に積極的に参画した。また、協会が主催して昭和7年大美野田園都市住宅設計図案懸賞募集や同社、協会、南海鉄道⁹⁾の共催によって大美野田園都市住宅博覧会⁹⁾を行っている。

関西土地は同12年6月新たな事業展開を図るために関西不動産⁹⁾と改称、不動産⁹⁾、城南土地⁹⁾、旭土地興業⁹⁾を姉妹会社として事業の拡大をはかった。その後の展開は、芳しくなく合併吸収分離を繰り返し同15年8月3日不動産⁹⁾となっている。その際、関西土地時代所有していた土地建物の帰属は不明である。

表－2 関西土地⁹⁾による住宅懸賞設計、博覧会、展覧会などの一覧

年代	期別・締切日	経営地など	タイトル名	主催	備考
昭和5	11月8日～未日	額田山荘	家族本位模範住宅展覧会	関西土地 大軌電車事業課	
7	8月15日正午	大美野	大美野田園都市住宅設計図案懸賞	日本建築協会	日本建築協会創立15周年記念事業
	10月10日～11月25	大美野	大美野田園都市住宅博覧会	日本建築協会 関西土地 南海鉄道	日本建築協会創立15周年記念事業 「建築と社会」に掲載
	11月1日～13日	南海高島屋	「住み良い家の展覧会」	日本建築協会	大美野田園都市住宅設計図・大美野田園都市模型展示
8	4月10日～5月未日	大美野	健康本位特選住宅展覧会	関西土地	住宅建築の宣伝
9	6月	大美野	改善住宅展	関西土地	一部「住宅」に掲載
10	4月15日～5月未日	大美野	春の模範住宅展覧会	関西土地	幼稚園開園、大美野会館開館
11	6月	大美野	健康本位特選住宅展覧会	関西土地	巡回バスの運転開始
	10・11月	大美野	健康住宅即売会	関西土地	
12	4月10日～5月未日	大美野	優秀住宅展覧会	関西土地	
	9月10日～10月10日	新森小路	高級住宅並びに模範商家の展覧会	関西不動産	高級住宅完成記念
	10月1日～	大美野	純日本建築展覧会	関西不動産	茶道宗匠設計のお茶人村建設記念
	10月	新森小路	数寄屋住宅建築記念	関西不動産	
	10月	新森小路	住み心地よき家の展覧会	関西不動産	
13	8月1日～	新森小路	実用住宅展覧会	関西不動産	
	9月15日～	大美野	厚生住宅展覧会	関西不動産	
	9月1日～3日	大美野	茶人村完成記念売出	関西不動産	一部現存

参考文献：帝国信託、関西土地、関西不動産の営業報告書並びに展覧会などで配布された住宅図録、日本建築協会発行「建築と社会」、住宅改良会発行「住宅」、大阪朝日新聞を参考にまとめた。

さらに、戦後不動共栄⁹⁾になり昭和37年7月12日に解散している¹⁰⁾。

3.2 下村喜三郎と関西土地⁹⁾について

建築技師として入社した下村喜三郎は、大正15年1月の写真図－2では、主だった社員を中心に位置しそれだけ期待される人物であった。設計部のメンバーと思われる昭和7年3月の写真図－3があり、下村は設計部のチーフとして仕事をし角野孝、三戸谷和久などが助手を勤めていた¹¹⁾。

設計部の動きを知る手がかりに住宅改良会発行の『住宅』による表－3がある。角野、三戸谷は『住宅』¹²⁾に設計部の一員として登場し、角野は大美野田園都市でライト風の家中野邸を設計し、三戸谷も同じく大美野で新日本の小住宅原氏邸を設計、住宅改良会主催の住宅貳百号記念「改良住宅」懸賞設計に1等で入選している。当然、下村も関西土地が大正末から宅地開発していた牧落百楽荘に昭和7年頃設計した自邸図－4を「量のない小住宅下村邸」¹³⁾として発表したり、「週末住宅と生活の簡易化」と題して執筆している。

3.3 田園都市設計のために欧州各国を視察

下村喜三郎は、関西土地発行の関西土地時報¹⁴⁾などに住宅、田園都市、大美野田園都市について執筆をしている表－4。彼は欧州各国を視察した内容を関西土地時報に「住宅のすなわち」表－5と題して18回にわたって開発者や住宅地の状況などを詳しく紹介した。その感想には、ろんどんーべりんがむを観て「一中略ーあわれな日本の一住宅経営関係の技術者である私は、長大息と共に、やわらかなRECREATION GRDの芝生に、身を投げ出して羨望と共に、のすたるじあでは決してない憂鬱に閉ざされたことであった」、ばあみんがむーばおんびるにおいて「一中略ー従来の工場地の概念から全くかけ離れた、BOURNVILLE INDUSTRIAL VILLAGEの印象は、永久に私から失われないであろう」などの内容からみて下村は英国の郊外住宅地づくりの賛美を繰り返すとともにわが国での実現に夢を描いていたようである（..印は原文のまま）。

帰国後大美野田園都市を設計した下村は、住宅地案内のパンフレットに、「田園都市とは レッチワースと ウェルウィンとの 田

図一 関西土地㈱の主だった社員（大正15年1月撮影）最前列が社長その後列左から2番目が下村

図一 関西土地㈱設計部の人達（昭和7年3月撮影）右側で立っているのが下村

図一 阪急沿線百楽荘に建つ元自邸（昭和7年頃 下村喜三郎設計 1996.2.21撮影）

表一 住宅改良会発行『住宅』に掲載された関西土地㈱の設計・施工による住宅等の一覧

年代	月	タイトル名	建設場所	備考	様式・平面の特徴
昭和7 (17巻)	6	ほのけない住宅下村邸	牧落百楽荘	設計者 下村喜三郎	洋風・家族本位
	6	新日本風の小住宅原氏邸	大美野田園都市	設計部 三戸谷和久	和風・中廊下
	5	週末住宅と生活の簡易化		設計部 下村喜三郎の文章	
	7	湖西風小住宅喜多氏邸		設計部 角野孝	洋風・居間中心
	8	ライト風の家中野氏邸	大美野田園都市	設計部 角野孝	洋風・居間中心
(18巻)	8	住宅式百号記念「改良住宅」		設計部三戸谷和久が1等入選	洋風・居間中心
		認賞設計入選案		日本趣味を加味した洋風住宅	
	10	M氏邸	平野荘園		洋風・ホール
	11	K氏邸	大美野田園都市		洋風・居間中心
		中西氏の邸	森小路		和風・3戸建・前廊下
		永田氏の邸	森小路		和風・3戸建・前廊下
9	6	無駄のない住宅	大美野田園都市	改訂住宅展	洋風・居間中心
(19巻)	7	藤本氏邸	大崎小坂		洋風・中廊下・応接室
	8	石川氏別邸	大美野田園都市		洋風・居間中心
(20巻)	10	台所設備S氏邸		台所の計画方法について	
		台所設備T氏邸			
	5	吉原氏邸	大美野田園都市		和風・中廊下・応接室
		岩本氏邸	大美野田園都市		和風・中廊下・応接室
	9	門：石川氏邸・竹中氏邸	大美野・沼甲子園		洋風
	10	小住宅一邸	大美野田園都市		和風・中廊下・応接室
	12	D氏邸	大美野田園都市	設計施工竣業部	和風・中廊下・応接室
(21巻)	3	藤垣氏邸	泉州忠岡		洋風・中廊下・応接室
	5	宮田氏邸	富根		洋風・中廊下・応接室
	6	ある玄関	大美野田園都市	建築本位・特選住宅展覧会	洋風の玄関・応接室
	9	建築本位・特選住宅展覧会	大美野田園都市	の出品住宅	
		三好氏邸	大美野田園都市	展覧会の案内洋風住宅の紹介	洋風
		三好氏邸	兵庫塚口	設計西土地誌	
12 (22巻)	6	中井邸	兵庫仁川	社名関西不動産㈱に改称	洋風・居間中心

注 様式・平面の特徴は執筆者による分析

表一 関西土地時代の執筆、作品等の一覧

年代	月	執筆タイトル等	掲載誌
昭和3	7-9	住宅欄 住宅部序〜三	関西土地時報
	10	住宅欄 牧落百楽荘 T氏別邸	関西土地時報
	5	9-5 育い島の来る家I〜III	関西土地時報
	10	丘に建つ家 上野芝・木村清氏邸（本社設計施工）	関西土地時報
		太陽に開く家 牧落百楽荘・吉米地蔵三氏邸（本社設計施工）	関西土地時報
		住宅の建築主と建築家	関西土地時報
		ある建築家の家 牧落百楽荘所在（本社設計施工）	関西土地時報
	秋	額田山荘	関西土地の額田
		額田山荘新日本住宅を語る	先出の案内
	5-6	住宅地のすなっぷ	関西土地時報
	6	1 千九百三十一年の日本の住宅	関西土地時報
	4-7	田園都市への思郷（一）〜完	関西土地時報
春		田園都市とは レガリスとカメルン との田園都市について	関西土地の大美野
		私達を御慰養下さい 東洋最初の田園都市運動のために	先出の案内
		明るい新しい健康な理想都市へ	
		大美野田園都市住宅の言葉	
	7	6 週末住宅と生活の簡易化	住宅（住宅改良会）
		量のない小住宅 下村邸（百楽荘）設計施工関西土地	関西土地時報
	7	夏と住宅	婦人フォーラム
	8	3次専断は住宅の生命・明るく・涼しく・この二つの条件こそ家庭の幸福を生むものです	大阪時事新報社

表一 関西土地時報「住宅のすなっぷ」による下村喜三郎の歩んだ欧州の田園都市等の一覧

回数	発行年月	頁	関西土地時報「住宅のすなっぷ」のタイトルと内容
1	昭和5	6	1 SIEDLUNG, BERLIN-BRITZ 建築家BRUNO TAUT, ENGELMANNなど
2		7	欠
3		8	欠
4		9	1 DUSSELDORF 市営住宅AM; CHEIN 1920年市建築局の設計
5		11	2 KOLN BICKENDORF・労働者階級の大規模な住宅地
6		12	2 AMSTERDAM ZUID-VUINDORP OOSTZAAN (田園都市) 他 天才作家DE KLERK
7		1	1 ROTTERDAM OUD-MATHENESSE 田園住宅群「ワッパ」市建築技師
8	昭和6	2	欠
9		3	2 LONDON BELLINGHAM 大倫敦市(LONDON COUNTY COUNCIL)による
10		4	2 BIRMINGHAM BOURNVILLE 世界に於ける田園都市の魁となった工業村
11		5	1 BIRMINGHAM YARDLEY WOOD 下層階級の人々の住む住宅地
12		6	1.5 MANCHESTER WITHINGTON MANCHESTER HOUSING CORPORATION経営
13		7	1.5 LIVERPOOL SPRINGWOOD 市の住宅委員会HOUSING COMMITTEE
14		8	1.5 PARIS- Pressis-Robinson 田園都市(Cite Jardin)
15		9	1.5 PARIS- GENNEVILLIERS田園都市(Cite Jardin)
16		10	1.5 LILAS及びDE DUGNYの田園都市(Cite Jardin)
17		11	2 ぼりのところどころ
18		12	1.5 BORDEAUX-CIALTIERS MODERNES FRUGES

園都市について」を書き、関西土地時報では「田園都市への思郷」と題して4回に亘って連載、E. ハワードの提唱する田園都市運動の内容を次のように紹介した。それは「一中略一英吉利の社会改良家、サア、エベネザア、ハワードは、千九百二年、名著『将来の田園都市』を世に問ふて、如何すれば、田園都市の生活に於て、都市の生活と同様の、物質的利便と社会的利益とが得られるであろうかを考へ、都市生活と、田園生活との他に、この両者の長所を結合して、積極的、活動的である都市生活のすべての利益を、美しく明るい田園生活の中にとりいれることの出来る、第三の生活環境の存在し得ることを主張いたしました。一中略一」のように説明している。それらの執筆から下村の考えを読み取ると彼は、英国から誕生した田園都市運動が欧州各国に広まったように日本においても実現すべきだと考えていたと判断できる。

3.4 大美野田園都市の設計

3.4.1 大美野田園都市とは

大美野田園都市は、昭和3年関西土地が大阪府南河内郡野田村と大草村（いずれも現堺市）にまたがる40万坪の農地を地主から買収、内16万坪の宅地開発である¹⁵⁾。「大美野」の住宅地名は大きな懸賞募集によって名付けられたもの、大草村と野田村を美しく結ぶという意味である¹⁶⁾。

3.4.2 街区割について

下村が大美野田園都市で何をしようとしていたかを知る手がかりとして、本人の話しの他に彼が作成したと考えられる大美野田園都市第一期売出地々割図図-5を掲載する「大美野田園都市 案内書」と「大美野田園都市 機上より見たる大美野・田園都市の大観」図-6とその裏面の第二期売出地地割図図-7がある。彼は、第一期の街区割を設計した覚えがあるが北西に広がる第二期は土木部の連

図-5 「大美野田園都市 案内書」に掲載する大美野田園都市第一期売出地々割図

大美野田園都市第一期賣出地々割圖

中が行っていたようだと語っている。何れにせよ南海鉄道沿線北野田駅から商店街を通して中央広場に至る周辺5万坪を設計したことは確かである。

その内容は、第一期の案内書によると「荘重広大なる近代ドイツ式の新道路網、車道と緑樹帯とペーブメントされた軽快な歩道、噴

図-6 「大美野田園都市機上より見たる大美野・田園都市の大観」

図-7 「大美野田園都市機上より見たる大美野・田園都市の大観」に掲載する大美野田園都市第二期売出地々割図

表一 阪神急行電鉄(株)時代の執筆による下村の住宅地経営の考え方

1. どうすれば沿線居住者を激増せしめるのか 不安定なる中流俸給生活者への簡易安全なる土地住宅提供法	
1. 緒言	<ul style="list-style-type: none"> ・当社住宅地経営の目的は沿線開発に在り ・土地住宅の年月賦提供法 ・土地住宅年月賦販売方法の矛盾 ・郊外地における賃貸住宅 ・郊外居住者の大多数は中流俸給生活者 ・新土地住宅月賦提供法 ・従来の土地住宅月賦販売の計算の基礎をより合理的ならしめ以て一層手賤に、即ち、借家同居同等の負担で優良なる土地住宅を土地住宅を購入することを得しむ。
2. 中流俸給生活者の居住し得る住宅の大きさ及び程度	<ul style="list-style-type: none"> ・貸家経営に於ける資金回収との利廻 ・家賃の算定 ・俸給生活者の支出し得る住居費 ・収入年額と住宅の大きさ及び程度 ・現在に於ける賃家の実際
3. 土地住宅の月賦購入と賃貸	<ul style="list-style-type: none"> ・土地建物共金二千九百十九圓の住宅の月賦購入に要する費用 ・購入か賃貸か
4. 土地住宅の新月賦提供法	<ul style="list-style-type: none"> ・土地住宅の新月賦販売法 ・新方法来に於ける途中解約に際する土地建物の処分
5. 新月賦販売法の経営者にとっての利害得失	<ul style="list-style-type: none"> ・新月賦販売法と現行十五ヶ年月賦販売法との比較 ・解約期間満了の場合 ・途中解約の場合 ・途中解約の場合の建物現在価格
6. 結論	<ul style="list-style-type: none"> ・概説 ・新月賦販売法要約 ・新月賦販売法の長所
2. 顧客層から見た都市近郊電鉄会社 住宅地経営の焦点	<ul style="list-style-type: none"> ・郊外電鉄会社の住宅地経営 ・住宅地経営の難点 ・分譲式郊外住宅の顧客層 ・産業上の地位別有業層 ・中流俸給生活者住宅
3. 住宅建築の常識 (阪急電鉄土地経営部社員に対する講演原稿)	
1. 序	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅は建築主自身の手で建てられた ・日本の民家 ・住宅は誰にも建てられる ・住宅の進化 ・住宅建築は一般建築界を指導する ・住宅建築の常識
2. 寿命から見た住宅	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の寿命は短い ・伸びゆく住宅 ・一室住宅 ・乾式構造の住宅
3. 構造法及び材料から見た住宅	<ul style="list-style-type: none"> ・木造住宅 ・鉄筋混泥土造住宅 ・木造住宅の各部材料 ・乾式構造
4. 機能から見た住宅	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の機能 ・衛生的には一戸建住宅 ・季候と住宅 ・間取と能率 ・設備と能率 ・住宅の美
5. 設備から見た住宅	<ul style="list-style-type: none"> ・建築設備の発達 ・住宅設備 ・集団住宅の共同設備 ・住宅設備は世界共通 ・設備費を惜しむな
6. 建築費から見た住宅	<ul style="list-style-type: none"> ・建築費の標準は構造法によって異なり ・鉄筋コンクリート造の場合 ・乾式構造の場合 ・木造の場合 ・建築費は設計によって決定す ・工費と工事期間 ・附帯工事並びに設備費
7. 住宅建築立案より居住開始迄	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅建築と建築家 ・建築主と建築家 ・暗設計 ・工事見積 ・工事請負人の決定 ・実費清算式施工 ・工事の監督 ・官廳手続

ると、郊外電鉄会社の住宅地経営の目的を次の二点に分析している。

その一は、住宅地経営事業から直接に利潤を得やうとすること、

即ち、電鉄会社の副業として之を行ふことであり、

その二は、住宅地経営事業は奉仕的に之を行ひ、以て沿線開発の速度を急速にし、運輸、電気供給等の本業の躍進を期すること、即ち、本業の側面工作として之を行ふことである。(その一、二は原文の通り)

以上の考えに基づいて、彼は「一中略—土地を売って儲けやうとすることは、純然たる土地経営会社のやることであって、郊外電鉄会社といふ特殊の立場にあるものとしては、少なくとも沿線に於ける土地経営の上では、その優先権を放棄したものと言ってもいいと思ふ—一中略—」と郊外電鉄会社の住宅地経営上の立場を明らかにし、顧客層は「一中略—資産家階級の有力な顧客を歓迎せずとも住宅実需家である小市民階級の顧客層を十分吸収し得るを以て沿線の人口は著しく増加し、本業の隆興を期し得る結果となると同時に、又、重大な社会問題である住宅問題解決の一端として、社会に寄与することを得るわけである。—一中略—」として捉えその社会性を説いている。

また、彼は分譲式郊外住宅地の顧客層は中流俸給生活者とし、「一中略—ここに言ふ、標準的な中流俸給生活者住宅とは、年収千五百円の俸給生活者が獲得し維持する負担に堪え得る住宅を言ふのである。」と想定し、経営方針では「即ち、土地、建物共売買する現在の分譲式住宅地経営法に於ては、収入年額千五百円の標準的中流俸給生活者の、十五ヶ年賦にて購入し得る住宅は、建築費延坪当り金一百円、土地代金一坪当り金十二円として、建物延坪数十五坪の大きさであることを知るのである—一中略—」と試算を示しながら住宅地経営の実務についても精密な分析が見られる。

下村は、建築技師でありながらなおかつ住宅地経営の感覚をもった人物であると評価できる。阪神急行電鉄(株)はそのことに着眼したのではないかと考える。

4.2 住宅地の設計

4.2.1 塚口田園住宅地

下村は、昭和16年8月住宅改良会発行の『住宅』に塚口田園住宅地図—9と俸給生活者の住宅図—10を発表した。彼は、この二千数百坪の小規模の住宅地の設計にあたって「一中略—ここに揚げた塚口田園住宅地は土地経営者の営利的商品である。尤も阪神急行電鉄会社の経営になるが故に、土地経営専門の者そのやうに、営利一本槍でないと勿論であるが、それにしても特定の需要者のために、社会施設として建設されたものではなく、所謂建売住宅なるが故に、万人向きの商品としての計画を要求せられることは当然である。—一中略—」と考え、ここでも欧州で視察した田園都市の実現にはほど遠い住宅地経営に深い焦燥感にとらわれていたと考えられる。

しかし、彼は小規模な住宅地であっても次の事項について配慮している。

「各宅地の一部を生垣の外において芝生とし、道路添の緑地としての効果をねらったこと、二階建を北に平家を南に配置して日照をよくしたこと、曲線道路による配置の美観を重要視したこと、小面積の宅地内で、便所や他人地境界線から井戸迄の距離の制限や、物干場に関する考慮等に相當の苦心が必要であったこと等は設計者とし

図一9 塚口田園住宅地の設計

図一10 塚口田園住宅地ろ号住宅

ての多少のみそである。一中略一」

下村は、外遊で感じたことを一部再現しようと試みたが、この執筆の最後に「一中略一欧州各都市の庶民住宅施設等とは、もとより比較にも何にもならない、一中略一どうにか、一つの形にまで漕ぎつけた庶民住宅地の抗議である。」と結んでいる。

4.2.2 東豊中住宅地

下村は、阪神急行電鉄が昭和7年頃から宅地開発を始めていた東豊中住宅地²⁰⁾においても宅地割りと住宅を設計していた。宅地割り

図一11 阪急経営 東豊中住宅地案内図

の手法は、阪急経営東豊中住宅地案内図一11からみると道路曲線と宅地との関係による美観の重視、各宅地の一部を生垣の外において芝生とし、道路沿いの緑地としての効果などを採用していることである。これらは塚口田園住宅地とかなり共通するところがみられる。また、住宅に関しては下村の所蔵図面からみて洋風、和風、平家建、二階建と幅広く設計している。彼は、この2箇所の住宅地の他にも京阪神急行電鉄の経営地田園住宅地などで、宅地開発や住宅設計に携わり彼の手腕をおおいに発揮したようである。昭和20年秋、京阪神急行電鉄を退職した。

4.3 住宅の設計

下村は日本の将来の住宅に関して昭和10年11月社報「住宅相談」の間で「住宅の外観は洋風、和風何れがよりしきや」では「私はこの問題に対しては、結局日本の住宅は、日本のものでなければならぬ。従来の伝統的な和風住宅を一步も出ないものでは、実際今日の用途には適しないが、さりとて、模倣的な洋風住宅も日本には適しない。こたに、新しい真に日本的な住宅の新様式が出なければならぬ時になつているのだと申したい。それが出るべくして未だ出ないのは建築家の努力が足りないと同時に、また建築主に於ても、心ある建築家に、充分、腕を振ふ機会を與へられることの少ない結果である。一中略一」と考えている。彼は阪神急行電鉄では経営地で多くの住宅の設計を行った。東豊中住宅地では別荘向き洋風二階建(347号)図一12を彼の自邸とも共通するモダニズムのデザインで設計している。また、彼のスケッチブックや写真集には、それらと

図-12 東豊中住宅地 347号住宅のエスキス

図-13 貸家の設計

は異なる洋風の大邸宅²¹⁾も手掛けており、住宅の設計に関しては卓越したデザイン力を持っていたものと評価できる。

5. 下村建築事務所の開設

大美野田園都市の経営が軌道に乗った頃、下村は建築家として自由に建築活動を行うために、昭和7年頃大阪市浪速区元町に仮建築事務所を開設し、昭和9年には兵庫県武庫郡精道村に移している²²⁾。彼の建築事務所では、長屋建の貸家図-13や商店建築などを手がけていた。当時建築家が長屋建住宅を設計することは希であったが、彼が欧州各都市で見聞してきたことにより庶民のために設計したものと考えられる。ただ、彼がいつごろまで建築事務所を開設していたかは明かではない。

6. 戦後の活躍

下村は、戦後しばらくして京阪電気鉄道株式会社に営業局田園住宅部長として招かれ、定年退職まで勤める。この時期、大美野や塚口のような目立った活動は見られないが、指導的な立場で住宅地経営に関わっていた²³⁾。

その後、阪神急行電鉄㈱の関連会社阪急産業株式会社の求めに応

じて不動産部嘱託として15年間ほど勤務し、主に宅地開発、住宅地経営に関与していた²⁴⁾。

7. まとめ 下村喜三郎の果たした役割と評価

① 下村が関西土地で設計した大美野田園都市は、E. ハワードの田園都市運動の理念の実現ではないが、駅から噴水までに距離をおいて商店街としていることは、レッチワースやウエルインに共通する処理である。また、大阪住宅経営株式会社の千里山住宅地²⁵⁾とも共通している。大美野のデザインは40万坪全部ではなかったけれども奔放な街区計画は関西の郊外住宅地開発に強烈なインパクトを与えた。住宅販売に際してパンフレットなどを通じて田園都市を紹介したり、関西土地時報を発行してヨーロッパの20世紀初頭の住宅地の実態を紹介するなど啓蒙的な役割を演じたことは評価してよい。

② その後鉄道企業系の住宅地開発に転じて東豊中、塚口などで業績を残すが大美野のような強烈な内容でなくトーンダウンせざるを得なかった。このことについて彼は「一中略一欧州各都市の庶民住宅施設等とは、もとより比較にも何にもならない、一中略一どうにか一つの形にまで漕ぎつけた庶民住宅地の抗議である。」²⁶⁾とかなり不満であったようである。戦後京阪に転じているがそこでは彼の能力を引き出せるような仕事に巡り会えていない。

③ 下村は住宅地計画以外に、建売住宅の設計をしている。その住宅地に適したものをというのであった。それ以外に自邸を含めいくつかの個人住宅を設計している。その作品に建築事務所を主宰する建築家の片鱗が見られるが、その活動は必ずしも長続きしているわけでない。戦時体制が強化された時期という時代の背景もあるがなんら他に影響を与えることがないまま引退している。

その中であって彼は、西欧の住宅地で見たと労働者階級の住宅に刺激され庶民のための長屋建住宅を設計し、市民派を貫いたことは評価してよい。また、当時西欧に展開した近代建築運動にも敏感に影響を受け卒業制作、自邸、建売住宅などに作品として発表していたことは、大美野田園都市のデザインとともに評価に値するものと考えられる。

④ 彼は図面の端々にフランス語を用いるほどフランス語が得意であったという。当時としては洋行帰りのリベラリストであった。関西土地以降仕事を転々とするが正社員ではなく嘱託として、かなり自由に振る舞いたいということであった。フランスの影響は彼の市民派を貫いた生き方や、フランスの近代建築運動の影響を感じさせる住宅建築のデザインに少なからず反映していたものと考えられる。

⑤ 彼の建築の経歴から見てなぜ関西土地社長竹原が自社に招き入れたのか疑問が残る。関東大震災の被災後関西に戻り高師浜や牧落百楽荘に居を構えることになるが、いずれも関西土地の開発地であることと何らかの関係があるかも知れない。この疑問はデベロッパーと建築家という構図から考えても早急に明らかにする必要がある。

謝辞

本稿作成にあたり下村喜三郎様並びに奥様の米子様にお世話になり、関西土地時報をはじめとする多くの資料を提供して戴きました。

1988年の春2度訪問し、大美野田園都市などについての考え方を窺いました。また、履歴に関してはご子息下村按理氏によります。

下村様の東京美術学校での卒業制作閲覧に際しましては、東京芸術大学美術学部建築科前野堯教授にお世話になりました。大美野田園都市売地割図の便宜を図って戴いた大美野幼稚園、白山家、また、下村様の履歴などに関しては株式会社大林組東京本社、阪急電鉄株式会社、京阪電気鉄道株式会社、阪急産業株式会社、関西土地株式会社の関係者、大阪府立今宮高等学校、元住宅改良会『住宅』編集人で新住宅社編集長小林清氏などの皆様にご教示いただきました。記して謝意を表します。

脚注

- 1) 本稿は、「長屋住宅による市街地形成に関する研究 その14 住宅地開発と長屋建設—関西土地の場合」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.305～306.1986,「郊外住宅地開発の史的考察 その1 関西における土地会社の活躍—関西土地の場合」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.357～358.1988,「郊外住宅地開発の史的考察 その2 住宅地開発に関わった人たち—下村喜三郎の場合」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.359～360.1988の既発表論文に加筆・修正を加えたものである。
- 2) 下村は、東京美術学校卒業時は鈴木喜三郎で、大正13年頃下村家に婿養子に入り下村と姓が変わった。下村のご子息下村按理談による。鈴木家及び下村家はいずれも建築関係に携わっている。
- 3) 住宅改良会：『住宅』第26巻 pp.44～49.1943.8,「一中略一昭和四年の春から秋にかけて、第一次欧州大戦後の有名な住宅経営の跡を、欧州各国に見学したことがある。一中略一」による。
- 4) 日本建築協会発行会員名簿による。下村は昭和7年から9年まで建築事務所として登録し、同18年までは、勤め先を阪神急行電鉄㈱としている、また、関西土地の関係者が大美野田園都市の開発の頃昭和に入って会員及び普通賛助員に名を連ねている。
- 5) 下村によると、共栄部部長阿部悌蔵に求められたとしている。阿部は、阪神急行電鉄株式会社発行『阪神急行電鉄二十五年史』社長、専務、取締役、監査役一覧1932.10.18に登場している。
- 6) 阪急産業株式会社：『阪急産業株式会社30年史』pp.174～175.1976.11.3阪急産業株式会社は、昭和21年11月20日阪神急行電鉄より分離独立して日興殖産㈱社長堀田正行資本金15万で発足する。同24年2月5日阪急産業㈱と社名を変更する。下村は元阪神急行電鉄に在籍していた社長堀田の招きにより阪急産業で宅地開発を行う（本人談）。
- 7) 関西土地㈱の関係者丹羽 良による。
- 8) 日本建築協会：大美野田園都市住宅設計図案懸賞募集規程『建築と社会』会告 Vol.15.No.7, 1932.7, 大美野田園都市住宅博覧会概要『建築と社会』会告 Vol.15.No.9, 1932.9による。
- 9) 関西不動産㈱の不動産の名前では戦争中では商売が出来ないという理由から改称している。関西土地の関係者による。
- 10) 野村徳七商店調査部『株式年鑑』1909～1924, 大阪屋商店『株式年鑑』1924～1942, 各社営業報告書、会社登記簿および関西土地㈱の関係者による。
- 11) 下村からの説明による。
- 12) 住宅改良会：『住宅』17巻6号p.333, 8号pp.484～485, 18巻6号pp.325～348による。角野孝は日本建築協会名簿には昭和4年から7年まで勤め先関西土地普通賛助員で登録されている。
- 13) 下村は大正13年頃から阪急沿線牧落百楽荘で居住し昭和7年頃自宅を設計している。いつまで居住していたかは明かでない。
- 14) 関西土地時報は関西土地㈱の関係者が発行していたようで、いつからいつまで発行されどの程度配布されていたかの詳細については明かでない。下村は文章は得意だったとし執筆のほかに装丁のデザインや関西土地時報を編集していたと語っている。表の関西土地時報はすべて下村からの提供による。その体裁は彼の記事のみを切り抜きスクラップブックに添付しているため残念ながら明かではない。
- 15) 大阪府南河内郡登美丘町町史編纂委員会：『登美丘町史』pp.300～302.1954.4.10, 買収にあたっては地元の小作人の反対があり3年間に及ぶ紛争の後、小作調停法によって面積の半分近くを地主からの買値で農家に譲渡することが約束されたという。
- 16) 大阪朝日新聞「田園都市名称の懸賞当選発表 大美野田園都市」1931.4.8, 『登美丘町史』pp.300～302と大美野を宣伝する「看板」による。
- 17) 大美野田園都市が案内書や日本建築協会発行雑誌などに公表された時には近代ドイツ式と紹介されていたが、下村のE.ハワードの田園都市運動に関連する多数の執筆や「私は他人のものはとらない、デザインにかかる時誰かが急に外国の理論を採用した」、「視察ではドイツは素通りした」の聞き取りと、関西土地の社運をかけた住宅地開発であったことから下村の意志より経営に有利な当時友好国であったドイツを前面に出したのではとの判断による。
- 18) 本人談「住宅地の街路は放射状を良しとしていた」と子息下村按理談による。
- 19) 関西土地が大美野を売り出すための案内書で、下村が昭和6年春に執筆したものである。表一4に掲載する。
- 20) 日本建築協会：東豊中住宅設計図案懸賞募集規程『建築と社会』会告 Vol.15.No.9 1932.9より開発年代を判断した。
- 21) 阪神急行電鉄㈱岡本駅南側に山中金属㈱山中直一郎を昭和13年頃などを設計している。下村の自筆のエスキスや写真及び子息談による。
- 22) 前掲4)による。角野孝を助手としていた（本人談）。
- 23) 下村はこの時期すでに開発されていた香里園住宅地に在住しており、昭和25年から始まった住宅金融公庫融資の住宅建設に関わっていた（本人談）。
- 24) 阪急産業に下村の自筆の報告書が多数保管されている。それによると下村は「下関市豊浦住宅地開発工事 工事費概要予算」、「長府開発工事設計案（竹中土木提出）に就いて意見」などに携わっていた。
- 25) 都市研究会の設計による。都市研究会は、大正6年10月「都市ノ経営ニ関スル諸般ノ事項ヲ研究シ都市ノ改良発達ヲ促シ福利ヲ増進シ国家ノ進運ヲ扶翼スルヲ目的トシ」（都市研究会規則第1条）とし、池田宏らが「官僚、識者を募って組織された機関で、大正7年4月～昭和20年1・2月まで機関誌『都市公論』を発行している。都市研究会については、財団法人日本住宅センター：戦前の住宅政策の変遷に関する調査（Ⅴ）—戦前住宅政策のキーワード50—p.18.1984.11及び財団法人都市計画協会：都市計画パオニアの歩1986p.163.1986.9.9による。千里山住宅地については拙稿山岡順太郎と大阪住宅経営株式会社、「日本建築学会計画系論文集第486号」pp.167～176.1996.8に発表している。
- 26) 4.2.1塚口田園住宅地での再掲である。

図版出典

- ①東京芸術大学芸術資料館：「蔵品目録 図案・デザイン・建築1991」p.25 1991.3
- ②③⑧①②③大阪工業大学工学部建築学科寺内研究室
- ⑤白山家
- ⑥⑦大美野幼稚園
- ⑨住宅改良会発行『住宅』26巻p.45 1941.8
- ⑩住宅改良会発行『住宅』26巻p.47 1941.8

(1996年4月10日原稿受理, 1996年10月31日採用決定)